The Japan Association of College English Teachers (JACET)

実践報告　分野／Listening

発音指導から新TOEIC®テストのリスニングへの対応
—音声レメディアル授業の一試案—
英文：A New Strategy For Higher TOEIC Listening Scores

倉田　誠　　（京都外国語大学）
藤倉　なおこ（京都外国語短期大学）
Todd Thorpe（京都外大西高等学校）

「ゆとり教育」を受けた学生たちの第一号が大学に入ってくる本年、大幅な学力低下を懸念する大学教員は少なくない。英語教育も例外ではなく、学生の語彙力、文法力、読解力、聴解力などをレメディアル的な授業を通して何とか伸ばす必要があると多くの大学英語教員は感じている。しかし問題はその方法である。どうすれば学生の参加度を助長し、彼らの英語力を伸ばすと同時に、達成感を経験させる授業ができるのであろうか。

本発表では日本人英語学習者が総体的に弱いとされる発音項目に授業内容を絞り、レメディアル英語科目としての発音およびリスニングの授業の一形態を紹介する。紹介する授業内容は、京都外国語大学および(財)大学コンソーシアム京都が提供する高大連携科目(約50名)や厚生労働省支援社会人委託訓練科目(約30名)等の中で実践しているものである。英語の“slow developer”といわれる学生も視野に入れ、「発音できる音は、聞き取れる」ということを前提に、学生に正しい発音を身につけさせ、TOEICなどの資格英語試験のリスニングスコアの向上を目標とする。大学全入時代であるからこそ、中高で軽視されてきた側面の一つである発音を有機的な形で教えることも大きな意義があることを強調したい。

1. なぜ発音練習なのか

ではなぜ発音を扱うのが効果的な英語学習につながるのであろうか。下記のような理由があげられよう。

(1) 授業評価調査の結果、学生は自分の発音を向上させたいと思っているが、どのように練磨すればよいかがわかっている学生は稀有である。またこれまでに彼らは体系的な指導をされたこともないとのことである。

(2) 発音は学生の英語素地にあまり左右されず、調音点と調音様式をしっかりと体系的に練習させれば、学生は短時間で正しい音を出せるようになる。したがって彼らの達成感および満足度は必然的に高くなる。

(3) 発音練習の性質上、受動的ではなく能動的授業を展開しやすい。また発音に特化した授業でなくても、10分程度の発音練習をウオームアップ的に入れることにより学生の授業参加度と集中度は高まる。

(4) TOEIC®テストのリスニング問題には、音の差異にポイントを絞った問題も少なくない。つまり、“slow developer”といわれる学生でも発音練習の成果がすぐに反映される可能性が高いので、学生の向上心を刺激することができる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

2. 授業の内容

次のような演習体系の授業を実践している。

(1) 日本人学生の音声的「コモンエラーズ」を中心に授業展開する。つまり、日本人が不得手とする母音や子音等をミニマルペアーの形式(各ユニット7ペアー程度)で取り上げ、次々にリサイクルさせる。全ての発音を網羅するのではなく、特に苦手とする発音だけを取り上げることで学生を飽きさせず、集中力を高めさせることが可能になる。

(2) 発音記号および音声学用語は極力使わないようにしている。英語学や音声学の知識がなくても、調音点と調音様式を習得させることにより、しっかりとした発音を身につけさせることが可能である。最初は発音方法を頭で理解させ、徐々に発音に要する筋肉を鍛えるという方法で、いわゆる「英語口」と「英語舌」を作り上げる。

(3) 単語レベル、文レベルのように徐々に難易度を上げていく。その単元の発音のみの一点集中型の練習をする。また AmiVoice CALL で学生の発音を客観的にチェックする。

(4) TOEIC のリスニング問題で練習を締めくくる。模擬問題を作成し、学生にチャレンジさせる。この問題にはその単元のミニマルペアーの単語がキーワードになるようにリサイクルさせて開発作成するので、しっかり練習した学生は正解する可能性が高い。

(5) 発音練習が単調にならないようする。時には映画の台詞なども使い、学生が習得した発音を含む語(句)が生起している箇所を聴かせて発音させるというリサイクルも行う。

3. 発音指導項目

英語を聴き取ることができない理由は次の2種類に大きく分類できるであろう。1つ目は脳のレベルであり、聞こえた音声に相当する語句が頭の中に存在しない場合である。もう1つは耳のレベルであり、聞こえてきた音声を正しく認識できていない場合である。本発表では基本的に後者に力点を置き、使用頻度が高い語彙を正しく発音できるようにして、その音声を文レベルや談話レベルでも認識できるようにする練習を実践している。発音指導項目は下記のような20種類で、5ユニットごとに復習を入れる。

1.compound noun vs. noun + adjective (e.g. lighthouse vs. light house)

2. [i] vs. [iː] (e.g. live vs. leave)
3. [e]vs.[æ] (e.g. bet vs. bat)
4. [e] vs. [ei] (e.g. let vs. late)
5. [ɔː] vs. [ou] (e.g. law vs. low)
6. [æ] vs. [ʌ] (e.g. bag vs. bug)
7. [ʌ] vs. [ɑ] (e.g. luck vs. lock)
8. [ɑr] vs. [ər] (e.g. heart vs. hurt)
9. [p] vs. [b] (e.g. pack vs. back)
10. [h] vs. [f] (e.g.. hair vs. fair)
11. [z] vs. [dz] (e.g.. cars vs. cards)
12. [ʃi] vs [si](e.g. chic vs. seek)
13. [s] vs. [θ] (e.g. sin vs. thin)
14. [v] vs. [b] (e.g. vest vs. best)
15. [l] vs. [r] (e.g. light vs. right)
16. homonym (e.g. bear vs. bare)
17. assimilation (e.g. meet you, send you, miss you)
18. linking (1) (e.g. keep on, cover up, sign up)
19. linking (2) (e.g. make it up, get it in, check it out, put it off)
20. linking (3) (e.g. pick him up, push her in, take him out, turn her off)

発表では上記のような発音項目をどのように音声学の専門用語を使わずに教え、学生がどの程度進歩したかを映像でも紹介できればと考えている。

NII-Electronic Library Service